脱帽

斎藤茂吉

一

もうそろそろ体に汗のにじみ出るころであつたから、五月を過ぎてゐたとおもふ。途中で買つた医学の古書をば重々と両脇にかかへて、維也納のシユテフアン寺のなかに入つて行つた。それは疲れた体を休め、汗をも収めるつもりであつたのだが、両脇に書物の包をかかへてゐるために、向うの禱卓のところまで行つて、それから帽子を脱がうとおもひ、寺の中のうすぐらい陰気な石の床上を歩いて行つた。いまだ卓までは十数

歩もあらうかとおもはれたころに、ひとりの男がつかつかと来て、『帽子をおとりなさい』といふ刹那に僕の帽子をば床上におとした。

そのとき僕はどう思慮したか、殆ど思慮のいとまもなく小走に走って行つて、重い書物をば卓のうへに置いた。

それからむらむらと憤怒の心が起つて溜まらぬので、彼の男を二たび見つけて、何かの形で突かかつてやらねばならぬといふ気がした。

然るに僕はさうしなかつた。陰気な寺の中の薄明が怒の行動に抑制を加へたと見えて、しばらく額に手を

当ててゐたが、僕は静かに行つて床上におとされた自分の帽子を取つて来た。それからそこの卓に小一時間も休んでゐた。心に湧いてくる事は、今してゐる教室の為事の内容などで、帽子をおとした彼の男に対する残念な心などは不思議にうすらいでゐた。

小一時間もそこに休んで、二たび書物を両脇にかかへて寺を出た。その時帽子のつばのところを口でくはへて来た。二度咎められては困ると思つたのである。そんなことがあつた。

二

シユテフアン寺の出口のところに立つてゐる老いさらぼひた媼の乞丐に書物の包を持つてゐてもらつた。それから帽子を二たび冠り、老媼の乞丐に札一枚呉れてまた書物の包を両脇にかかへて寺を出た。

薄ぐらい寺の中から出て来ると、維也納の澄んだ空から差す日光はまばゆいほどである。鋪道をしばらく歩いてくるうちに、もう体に汗のにじみ出るのをおぼえる。

道の左側に絵葉書店があつて、店頭にあらゆる葉書を飾つてゐるのをながめて居たところが、先ほどのことが気にかかり出して、ゐても立つても居られなくなつた。さればと謂つてその憤怒をばどういふ行為として追ひやらうか、その方便が分からない。僕は差向き、Dienstmann を呼んで書物の包をば宿に届けさせた。そして茫然としてしばらく街頭をながめてゐた。Dienstmann といふのは、嘗て森鷗外が豊前小倉に「伝便」が居るといつてはじめて文章に書いたあれである。

茫然としてゐる僕に、ヴイ・ザ・ヴイを歩く一人の清瘦な娘が目についた。娘は僕を一瞥微笑して、それ

から見向もせずに歩いて行つた。その娘のことを留学生どもは、「喪章」と呼んでゐたのは、その時分静かな佳い顔をしたその娘が、帽に黒の紗を垂らしながら珈琲店の隅にゐて、日本人の留学生ともつつましい話を取交はしたといふことから名づけた名である。

墺太利が戦に敗れて、ひどく困つてゐたころである。清痩な「喪章」を見ると、脱帽のことで起つた僕の憤怒の心がいつか静まつた。「喪章」は、その頃はもはや黒い紗を帽からはづして晴々とした顔をしてゐた。

三

維也納の滞在も、間もなく年を越すころになつた。僕は某区の猶太殿堂（シナゴオグ）に入つて行つた。殿堂内では今儀式がさかんに行はれ、一部の人は絢爛たる法衣のやうなものを著てゐた。

僕は、つつましやかに、脱帽し、あいて居た席に腰かけて、気を落付かせようとした刹那に、前の方から一人の男がつかつかと来て、『どうぞ帽子をおかぶり下さい』と云つた。

僕は、驚いたが、左様した。恐らくはたで見たら、僕の顔が赤くなつてゐたに相違ない。

この殿堂内では、脱帽しないで、帽子をかぶるものだといふことを隣人が話してくれた。

底本：「日本の名随筆　別巻31　留学」作品社
1993（平成5）年9月25日第1刷発行
底本の親本：「斎藤茂吉全集　第八巻」岩波書店
1952（昭和27）年6月発行
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2010年5月30日作成
2011年4月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。